

デジタルハリウッド大学

アドバイザリーボード会議

2025（令和 7）年度

2025 年 7 月 31 日（木）11:30-13:00

[会 場] オンライン開催

[出席者]

稲見昌彦、川田十夢、ドミニク・チェン、池谷和浩（大学事務局長・大学事業部長）、今田健一郎（大学院事務局長・大学事業部副部長）

[陪 席] 杉山知之学長※、小野妙子（大学事務局）、田村結奈（大学事務局）※Zoom のチャット機能を用いた発言

[議事]

- 1 DHU（デジタルハリウッド大学）の活動についての報告
- 2 大学認証評価の観点を踏まえた自己紹介と活動共有
- 3 総括とデジタルハリウッド大学の今後の展望について

1. DHU の活動についての報告

池谷事務局長よりアドバイザリーボードの背景と目的を説明。最新のトピックスとして、大学が機関別認証評価において適合の評価を得たこと、また 2025 年 2 月よりベネッセグループ傘下に入ったことを報告した。続いて、大学の学部生がアカデミー賞短編アニメーション部門のショートリスト入りを果たしたことを紹介し、大学としての成果が広く世に認められたことを述べた。さらに、AI を活用した教育支援システム「[Ututor](#)」を開発・実装したことを共有。加えて、学内にバーチャルプロダクション設備を新設する計画を発表した。最後に、[開学 20 周年記念イベント](#)の開催について報告を行った。伊藤穰一氏、落合陽一客員教授、玉城絵美氏、佐々木紀彦氏を招き、杉山学長の投げかける「AI 時代における未来技術と人間性」「テクノロジーと自然、人間の共生」などの問いを軸にパネルディスカッションを実施し、約 400 名が参加する盛況な会となったことを共有した。

2. 大学認証評価の観点を踏まえた自己紹介と活動共有

各ボードメンバーより、各々のビジネスや研究について近況報告があった。DHU の機関別認証評価結果を踏まえ、教育課程、学習成果、教員、大学運営の質向上に向けて、

さまざまなヒントが提示された。

(ドミニク氏)

・昨年 9～12 月に金沢 21 世紀美術館と共催で[発酵文化芸術祭](#)を企画・キュレーション（小倉ヒラク氏と協働）。被災した酒蔵支援の思いを背景に、多様なインスタレーションを展開。例として、お酢の香りと向き合う部屋や、醤油倉庫の空気を攪拌する装置、味噌の熟成状態を可視化するロボット「味噌ボット」などを制作。味噌ボットは会期後、実際の製造現場に導入され、発酵過程の計測に活用されている。また、ぬか床ロボット「[Nukabot](#)」は [ACM SIGGRAPH' 24](#) 「Emerging Technologies」でデモ発表を行った。

・[RITA MAGAZINE 2](#) では「死者とテクノロジー」をテーマに寄稿。編集者・キュレーターであった親友を亡くした経験をもとに、VR/AR での忠実な死者再現に違和感を覚え、少しの思い出すヒントを与えるテクノロジーの活用について模索。関連する取り組みとして、あいちトリエンナーレ 2019 年の出品から継続する「架空の遺言」を再生するインスタレーション「[Last Words / TypeTrace](#)」についても紹介された。

・学生とともに発表した論文が [ACM SIGGRAPH'24](#) で受賞したのをきっかけに、適切なタイミングで相槌を打つ相槌ロボットを開発中。自身の経験や、相槌の有無が会話のしやすさに影響する事例から、対面コミュニケーションの補助を目指す。

・草原真知子氏の幻灯機コレクションを保管するプロジェクトが、文化庁のデジタルアーカイブ推進事業として採択されたことを報告。19 世紀から 21 世紀のテクノロジー史の連続性をつなぐ試みとして取り組んでいく。

・文学フリマ東京に初参加し、自身やゼミ生の卒業論文を含む 5 冊を制作・販売。自身の SNS アカウント削除を機に、参議院議員選挙前というタイミングもあり、イベント中に朝日新聞から取材を受けた。そこでは、「急速な拡散」ではなく発酵する SNS の必要性を提案。その具体化として、AI が日誌を解析・要約し、問いを返すジャーナリング支援ツールを開発し、実装に向けて実験を重ねている。

(川田氏)

・「アメちゃん NFT」を開発し、大阪・関西万博などで配布。飴に NFC チップを内蔵し、スマホでかざすと NFT を取得できる仕組みを実装。NFT 配布を日常的・軽やかな体験にすることで、Web3.0 の日本のアレンジを模索。パナソニックや大阪全域の飲食店と連携し、スポンサーには[電通](#)が参画。

- ・飛び出すアクリルスタンド「[どこでも自販機](#)」を一般流通化。アクリルスタンドにスマホをかざすと AR コンテンツが再生される仕組みで、AR の価値向上に寄与するとともに、空間コンピューティング領域において世界初の経済圏を構築。

- ・デジタルクリエイターの作品を「売り物」として流通させることの意義について提言。アーティストと共にデジタルコンテンツの市場価値を高め、流通を促進していきたいとの展望を示した。

(稲見氏)

- ・ドイツの古城を改装したセミナーハウスで開催される「[Dagstuhl Seminar](#)」にオーガナイザーとして参加。5 日間滞在し、「Nature-HCI」をテーマに、世界各国の研究者 20 名と議論。人と機械の関係からさらに自然との関わり方、在り方、そもそもの自然の定義についても意見交換が行われた。

- ・植物学者との共同研究を約 6 年前から継続。国のプロジェクトとして植物発見を支援する取り組みとしてスタートしたが、小石川植物園に関わっていた植物学者・塚谷裕一氏と出会い、植物そのものではなく植物学者を研究対象に。発見の鍵となる「雰囲気」や「香りの違い」など、言語化困難な感覚を計測し、行動変容との関係を解析している。

- ・現在は植物研究への関心を継続しつつ、新たにヒューマン・ガット・インタラクションに着目。これは人間と「腹の内」との対話とも言える領域で、生理学的には脳腸相関として知られる。脳と腸の間には多様な相互作用が存在し、正しい情報を正しく伝えても必ずしも行動変容が起こるわけではない現実から、「理解」だけではなく「腑に落ちる」ことが心を動かす鍵であるとの考えを提示。

- ・無意識に働きかける理想的なブレイン・マシン・インターフェースの可能性として、脳に直接刺激を与えるのではなく、身体を介し、特に筋骨格系ではなく内臓に着目するアプローチを模索。そこからマイクロバイオーーム（腸内常在菌・皮膚常在菌）や植物のバイオーーム研究にも関心を広げている。

- ・「[東京大学カオスキャンパス](#)」が 8 月 1 日より本格始動。多様な分野から選抜した 40 名を対象に、プロデューサーのメンタリングを含む教育プログラムを実施していく。

- ・ライブコーディングを活用した迅速な試作・検証に取り組み、事務手続き支援ツールなどを短期間で開発。生成 AI や API を用いた開発は、学生との研究指導など普段の仕事にも通じると述べた。

・最後に、AI 時代においては「何か」の模倣ではなく、新しいスタイルや流派を生み出すことこそが価値を持つと指摘。クリエイターのみならず、プロデューサーの役割が一層重要になるとの見解を示した。

3. 総括とデジタルハリウッド大学の今後の展望について

ボードメンバーを代表して川田氏より以下のコメントがあり、会を締めくくった。

(川田氏)

・言語化できない事柄には「どう説明するか」「どう体得するか」という課題があると指摘。その具体例として本日の議論に挙げた「菌」のテーマを挙げ、現状では AI と結びつくために言語化が前提となる一方、言語を介さない別の接続もあり得ると示唆した。さらに、植物学者が「あれ？ ちょっと待って」と直感的に希少種を見つけ出すような“センス”はまさに言語化の限界を示すものであり、この感覚の妙をいかに伝えていくかが非常に興味深い。

これに対し、ボードメンバーの意見を踏まえ、池谷事務局長より総括と、デジタルハリウッド大学としての今後の方向性について以下のように示唆があった。

・「AI の時代になり、作る人はこれまで以上に作るようになる」との実感を述べた上で、従来多用されてきた「越境」というキーワードすら変容しつつあると指摘。テクノロジー分野の人々はアナロジーに非常に長けており、それはコンピューターやネットワークがアナロジーを基盤に発展してきた背景にも由来すると分析。さらに、地球科学・工学・芸術といった分野を横断し、新たに構築し直せるワクワクするフロンティアが広がっていることへの希望を示した。

・これまでテクノロジー以外の分野については教養科目として幅広く学び、知の源泉を得ることを重視してきたと振り返った。そのうえで、今後 10 年・20 年先の未来を生き抜くためには、こうした分野を教養の枠にとどめず、演習科目や専門科目として本編のカリキュラムに組み込み、例えば本会で議論された「菌」や「バイオ」なども正規科目として扱うことを検討したいと述べた。

最後に、池谷事務局長より開講 20 周年記念イベントでのパネルディスカッションの様子が共有され、次回のアドバイザリーボードでは、この内容を踏まえて議論をさらに深めていきたいとの意向が示された。また、池谷事務局長と稲見氏との間で以下のやり取りがあり、本会は締めくくられた。

(池谷)

「感覚的なものを、学校という装置を通じてどう伝えられるのか。その方法をつくりながら形にしていきたいですね」

(稲見氏)

「昔からそうやってきていますよね。言語化できないからこそ、つくったものを使ってコミュニケーションするんです」

(池谷)

「そうですね。つくったものを通じてですね」

(稲見氏)

「そう。だから、私たちはつくるんです」

以上